

信仰者にとって、信仰を得る前と後とでは、その信仰者個人の性格が変わるか否かという問いは、昔からよく問われてきたことです。性格が信仰によって変わるということは確かに「あり得る」と言うことができますし、逆に「変わらない」と言うこともできると思います。私自身を振り返ってみると、せっかちな性格は信仰によって変わったようには思えません。

けれども、性格というよりも、人格という側面から見ると、信仰によって人格は大きく変わるものだと言えるのではないのでしょうか。人格は、その個人が持っている価値観を反映しており、例えば、他者との人間的な関係性をどのような価値基準に基づいて築いていくかについて、その人個人の考え方が反映しているものです。対人関係の価値基準が信仰的な隣人愛に根差しているならば、信仰によってその個人の人格のありようは大きく規定されることになりました。ただ、人間はどのように理念的に考えていたとしても、危機的な状況に直面して下される行動が普段から言っていることと違う場合があるものです。本人にとっても自分のとっさにとった行動が意外過ぎることもありうるのが私たち人間の姿です。

さて、ヨハネ福音書3章冒頭には、ファリサイ派に属するニコデモという人物がイエスを訪ねて問います。1節に『ユダヤ人たちの議員であった』とあるように、サンヘドリンの議員でもあった人物です。ですから、宗教的にも政治的にも力のある人物であったのです。ところが、そのような有力な人物が2節にあるように、夜にイエスのもとを訪ねてきたのです。他のファリサイ派や議員らにイエス訪問の事実を知られたくなかったんです。ニコデモは、イエスがなされていた奇跡の業が神のものとから来た教師であるから行うことができたことを認める発言をしています。それに対してイエスは、『人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない』（3節）と言うのです。つまり、神の霊によって生まれなければ、神の支配を見ることはできないというのです。神の国を見ることのできる条件は「新しく生まれること」です。英語訳聖書は、このことを *born again* と訳します。ですから4節でニコデモは『もう一度母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか』と物理的な意味でイエスの言葉を受け取りました。そこでイエスは5節で『だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない』と語って、新しく生まれるためには神の霊によらなければならないことを指摘するのです。神の霊によって洗礼を受けなければならぬという、この表現は、イエスの昇天後のキリスト教会での福音伝道の正当性が反映しているのですが、いずれにしても、神の意志によって新たに生まれ変わる必要があることだということです。神の霊による洗礼を受けるならば、その人の人格が神の意志を守り抜いていきたくことを目指すようになるということです。

これに対して、ニコデモが属するファリサイ派の基本的な神理解は違います。人間の側で神の戒めを守って日常生活をすることで、神の意志を考えるのではなくて、神がどのように自分に対して御業を成そうとしておられるかを考えることもなく、ただ

神の戒めを守る日常生活を行うことに専心するのです。ですから、人生の分岐点のよう出来事に直面しても、神は自分にどのように行動することを望んでおられるかということを考えることはしません。ただただ神の戒めを守る行動をし続けることが最優先されて、神の意志としての聖霊の働きを全く顧みることがないのです。いわば、神の意志がどこにあるかを考えることもないので、ある意味ロボットのような人生を過ごすことになるのです。どれだけ戒めを自分を守ったかを数え上げて自己満足する生活ですから、いつの間にか、神の意志の具体化である戒めの根本的な意味も考えることがなくなってしまうのです。

イエス・キリストの父なる神は、人間の目に見えない神です。私たち信仰者は見えないものに目を注ぐ（IIコリント4章18節）ことが大切な信仰的姿勢なのです。信仰的な姿勢を取り払ってみても、私たち人間は目に見える世界だけに生きています。人間が人間として生きることは、目に見えない世界と関わり合って生きることだと言っても過言ではありません。例えば、時間などはその典型的なものです。時間には目に見えませんが、私たちは事物の動きや変化によって時間を感じて生きています。それは神の霊でも同じで、目には見えないけれども、ある時、神の意志が現わされていたことに気づくことがままあるのです。苦難に直面した時などは、神の霊の導きを疑うような場面もあつたりするのですが、時が経ってみると、神の霊の導きがあつた時にあつたことを理解することがしばしばあります。けれども、それは苦難の時に神の意志が現わされることを願っていたからこそ、後からわかるわけで、初めからフアリサイ派の人々のように、神の意志がどこにあるのかを考えることもしないならば、神の霊がどのように表されたのかは分かりません。

キリスト教信仰においては、旧約聖書の神理解を基本的に継承してきますので、十戒の偶像禁止の思想を受け継いでいます。けれども、人間的な立場からするならば、私たち人間は目に見えない不可視の存在を可視化する偶像礼拝に常に陥りやすいのです。目に見えない神の霊を可視化するためには、偶像礼拝を手掛かりに霊の可視化をしたくなるものです。偶像による神の可視化は、目に見えない存在を一定の場所に固定させますので、偶像の神は目に見えるようになるわけですが、自由に人間に働きかける霊の働きは限定されることとなります。なぜなら、その固定された偶像の前に行かなければ、霊の働きに浴することができなくなるからです。さらに言えば、フアリサイ派の人々が戒めを守ることに汲々としてしまうのも、言語による神の偶像化の一つであるといえます。言葉によって神の意志を定義づけ、観念的に固定化することになります。例えば、日本には様々な場所に神の聖地があつて、そこに巡礼をする事象があります。聖地巡礼は世界的にもよくみられる現象です。けれども、私たちプロテスタントでは聖地巡礼を行うことは稀です。このように、神の霊が目に見えない子とは、様々な偶像礼拝に結ぶ就く危険性があるのですが、それを乗り越えることが、神の霊の自由な働きを可能にしていることを改めて確認したいと思えます。ニコデモの問いは、まだニコデモ自身が偶像礼拝の意識の中にとどまっていることを表していますが、私たち信仰者も、偶像礼拝の誘惑にいつもさらされていることを肝に銘じたいと思えます。

